
アイドル探偵 3 「波乱の京都旅行」前編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 3 「波乱の京都旅行」前編

【Nコード】

N8690L

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

駆け出しアイドル・寿々菜とトップアイドル・和彦の迷コンビ探偵シリーズ第3弾！

京都へやってきた寿々菜たち一行。

せっかくの慰安旅行だというのに、寿々菜は自ら事件に飛び込んだ！消えた名画は一体どこへ行ったのか・・・？

第1話 波乱の幕開け

なんでこんな奴と旅行しないといけないんだ！！

4人中1人ではなく、

4人中4人がそう思っているのだから世話ない。

しかし、

なら、こんな旅行、やめればいいじゃないか、

という訳にはいかない複雑な事情があるのである。

ここは京都駅の新幹線のプラットホーム。

しらきすす

お馴染のメンバー、スウこと白木寿々菜^な、

な

KAZUこと岩城和彦^{いわきかずひこ}、

いわきかずひこ

芸能人ではないので特に別名がない武上^{たけがみ}と山崎^{やまざき}が、

たけがみ

やまざき

荷物片手に新幹線から降り立ったところだ。

元はと言えば、和彦のマネージャーである山崎が、
ろくに休みも取れないトップアイドルの和彦のために、
骨休めの京都温泉旅行を企画したのが始まりだ。

しかし、この山崎。

純粹に和彦のためを思ってこの旅行を企画した訳ではない。

山崎は和彦のことが好きなのだ。

だから、「マネージャーですから！」とちゃっかり自分も同行している。

山崎は30歳。

見た目はそんじょそこらの芸能人に負けていないし、気も利く。21歳の和彦からすれば、少々年上、ということを除けば、何も文句はない・・・

いや、ある。

山崎は男なのだ。

という訳で、貞操の危機を感じた和彦は、同じく和彦に恋心を抱いている・・・つまり、山崎のライバルである、

事務所の後輩の寿々菜を旅行に誘った。もちろん寿々菜に断る理由などない・・・

いや、こちらもある。

寿々菜は高校生なのだ。

学校がある。

ただこうして、和彦と山崎と共に、京都に来ているのは、学校に「仕事なんです！」と嘘をついたからに他ならない。

寿々菜の通う北原高校は普通の公立高校。

芸能活動を理由に学校を休むことなど認められないが、

芸能活動をしているくせに、ろくに休む必要のない寿々菜が珍しく（初めて？）、

仕事の為に学校を休まなきゃいけない！ということで、

「よかった、よかった。ようやく芸能人として芽が出てきたのか」と涙ながらに許可してくれた。

寿々菜としては、胸が痛まなくてもなかったが、

「和彦さんを山崎さんの魔の手から守るのも、仕事の内！」と割り切って、

スキップでもしかねない勢いでここまでやってきた。

で、武上は、ということ、

こちらは寿々菜に惚れている。

それに気付いていない寿々菜は軽い気持ちで「武上さんも一緒に行きませんか？」と誘ったのだが、

武上は、犬猿の仲の和彦と一緒にということにはこの際目を瞑り、「行きます！」と返事二つで了解した。

まあ、警視庁捜査一課の刑事が、こうやってのんびりと旅行に来られるというのは、

日本が平和な証拠なのかもしれない。

とにかく、こうして、

和彦と、和彦を狙う寿々菜と山崎、そして寿々菜を狙う武上、というお世辞にも友好的とはいいかねる4人が一緒に旅行することになったのだ。

もちろん、誰もこの旅行が平穩無事に終わるとは思っていなかった。

きつと旅行中のどこかで、一混乱あるはず・・・

しかし、まさかそれが旅館につくなり起こるとは、さすがに誰も思わなかった。

いや、旅館を予約した山崎は、薄々覚悟していたのだが・・・

「おい、山崎。なんで二部屋しか予約してねーんだよ」

温泉旅館としてはかなりグレードの高い老舗旅館のロビーで、和彦は山崎を睨んだ。

「元々は僕と和彦さん2人のはずだったから、一部屋しか予約してなかったんです。

それが急に、お邪魔虫・・・じゃなかった、スウと武上さんも来ることになったんで、

慌てて部屋を増やそうとしたんですよ。でも、いっぱい、もう一部屋しか取れませんでした」

普通に考えれば、4人で二部屋なのだからじゅうぶんなのだが、先ほどの事情により、この4人で二部屋はありえない。

「うーん」

和彦は腕組みをした。

「よし。俺と寿々菜、山崎と武上、で、どうだ」

「はい！」

「ダメです！」

「許さん！」

誰が何と言ったかは説明するまでもない。

「たく、しゃーなーなあ。じゃあアナログに『グつつぱ』で決めるか」

「よし、いいだろ。いくぞ！♪グつつぱーで別れましょー♪」

「ちよつと待て、武上！なんだ、その歌！」

「『グつつぱ』と言えばコレだろ」

「違う！♪グツパグツパグツパでしょ♪だろ！」

「さすが、和彦さん。歌がお上手ですね。でも♪グウとおっパ、グつつぱ♪ですよ」

「山崎さん、何変なこと言ってるんですか？♪グッパでホホホイ♪です！」

なんだ、ホホホイって！？

全員の視線が寿々菜に突き刺さったが、そんなことでめげる寿々菜ではない。

強引に「グッパでホホホイ」（どのタイミングで手を出すか難しい）で、

部屋分けをしてしまった。

その結果・・・

和彦と武上、

寿々菜と山崎。

「やり直しだ」

「やり直そう」

「やり直しですね」

「やり直しましょう」

その後、「ホホホイ」が行われること10分。いい加減、旅館の人も苛々してきたところで、4人は重要なことを思い出した。

寿々菜の性別が「女」ということだ。

かくして、和彦・武上・山崎で一部屋、寿々菜で一部屋、となった。

「・・・1人なんて寂しいです」

「そうだろうな。よし、俺と一緒に家族風呂入ろうぜ」

「え？ええ？いいんですか？」

和彦の提案に真っ赤になる寿々菜。

だが、真っ青になった武上と山崎にあっさり却下され、4人は部屋へと向かった。

そして、部屋に荷物を放り込むや否や、和彦は「温泉だ！」と、押入れから浴衣とタオルを引っ張り出した。

「和彦。ちょっとは観光しようとか思わないのか？」

「あんな、武上。俺たちは温泉旅行に来たんだ。温泉に入らなくてどうする」

もっともである。

だが、普段から仕事であちこち行っている和彦と山崎はともかく、寿々菜と武上は、やはりせっかく京都まで来たのだから観光したい。

「寿々菜さん。僕と一緒に観光に行きますか？」

「そうですね。温泉は後でも入れますし」

え？俺と一緒に？

と、武上は心の中で訊ね、そんなわけないか、と心の中で付け足した。

まあ、寿々菜と2人で京都観光できるだけでも、武上にとっては幸せだ。

ところが、ここで思わぬ伏兵が現れた。

「僕も、行きたいところがあるんです」

「え？山崎さん？」

武上は目を丸くした。

山崎は、武上と寿々菜がくつつくことを奨励している。

そうすれば、お邪魔虫の寿々菜がいなくなり、和彦を独占できるからだ。

山崎のその考えを、武上も知っている。

その山崎が、和彦と温泉に入るのではなく、他に行きたいところがあるとは……

意外だ。

「どこに行きたいんですか？」

「F美術館です。ちょっと見たい絵があつて。あ、もちろんお2人の邪魔はしませんよ。」

僕は1人でいきます」

武上はホッとした……。のも束の間、今度は寿々菜が意外なことを言い出した。

「私も！私も絵を見に行きます！」

「はあ？」

山崎が露骨に嫌な顔をする。

「スウが絵に興味あるなんて、初耳だな」

「私だって、絵くらい見ます！」

寿々菜のキャラクターをご存知の方なら、速攻で「そんなわけあるか！」と突っ込みをされることだろう。

そして、その通りである。

寿々菜が絵に興味を示したのには訳がある。

実は数日前、絵を好きな山崎が事務所で画集を見ていると、

和彦が「へー。山崎、絵なんか好きなんだな」と感心したように言った。

それをちゃっかり聞いていた寿々菜は、自分も和彦の興味を惹きたくて、

こんなことを言い出したのである。

「寿々菜さんが行くなら、僕も行きますよ」

武上が仕方なく言う。

こうして、和彦は温泉へ、

寿々菜と武上と山崎はF美術館へと行くことになった。

まあ、ご想像の通り、これがそもそも間違いの始まりである……

第2話 名画

「なんだ、あれは？」

武上はF美術館が見えてきたところで、思わず呟いた。
寿々菜も同じことを考えていたらしく、首を傾げている。

F美術館の前には大変な人だかりができていた。
しかも、その半分はマスコミのようである。

「お2人とも知らないんですか？最近テレビで話題なのに」

得意げに言う山崎。

毎日殺人犯と追いかけている武上が「最近テレビで話題」
のことに疎いのは仕方ないとして、

仮にも芸能人である寿々菜がこの手のことを知らないのは頂けない。

「1ヶ月ほど前、ある資産家の自宅から一枚の絵画が見つかったんです。」

画家不詳なんです、この絵が素晴らしい、とのことで結構な高値がついたんです」

「へー」

私だって絵くらい見ます！と言ったわりに、無頓着な寿々菜。

「『轍^{わだち}』という題の絵なんです、

最終的にF美術館の館長が買い取り、今日お披露目、となったわけ
です」

「それでこの人ばかりか・・・」

日本で、無名の画家の絵に高値がつき、これほどまでに注目を集めるのは珍しい。

絵が好きな山崎ならずとも、一目みたいという人間は多いようだ。

ミハーな寿々菜も目を輝かせた。

「その『轍』って、どんな絵なんですか？」
「これだよ」

山崎が鞆からチラシを一枚取り出す。

「轍」の公開を宣伝したF美術館のチラシである。

「あれ？絵の写真とかは載ってないんですか？」

寿々菜がまじまじとチラシを見て訊ねた。

寿々菜が不思議に思うのも当然だ。

こういう場合、チラシに絵の写真が載っているのが普通だが、このチラシには「轍」の写真は載っていない。

ただ、大きく「話題の『轍』、ついに公開！」と大きな文字が躍っているだけである。

「よく見てみなさい。チラシの背景全体にボンヤリと絵が見えるだろ？それが『轍』だ」

なるほど。

茶色のカラーのチラシ全体に、うつすらと絵らしきものが印刷されている。

それも、絵のどこか一部をアップにした物だ。
おそらく、馬車か何かの車輪とその轍のアップだ。

「わざと完全な絵の写真は載せずに、見たい！って心理を刺激してるんだ」

「えー・・・セコイですね」

「何を言ってる！」

山崎が憤然とした。

「こういう絵は、個人の手に渡ると、もう見る事ができないんだ。それを、こうして美術館で見れるんだから、ありがたいことだよ」

寿々菜と武上は、「ふーん」といった感じである。

だがまあ、せつかくここまで来たのだ。

話題の絵とやらを一目拝んでも罰は当たるまい。

3人はF美術館の入り口に近づいた。

和彦が一緒なら、たちまち大騒ぎだろうが、

幸い今日はその心配はない。

寿々菜が誰にも気付かれないのは、いつものことである。

ところが、どうも様子がおかしい。

美術館の前のマスコミは、「ついに話題の絵が公開されます！」と、騒いでいるのかと思いきや、
どうも友好的な雰囲気ではない。

マスコミ以外の一般客も口々に何か不満を口に出している。

「どうしたんだろう?」

山崎も不審に思い、さっそく近くの中年男性を捕まえて事情を聞いた。

「何を騒いでいるんですか?」

「どーもこーもないわ! せっかく大阪から来たのに、『轍』の公開は中止とか言いよる!」

「え? 中止?」

「そつや! 理由も言わんと・・・全く、電車賃なんばや思てんねん!」

そんな怒られても、山崎にはどうしようもない。

だが、「轍」を見られないとなると、やはり山崎としても残念だ。実を言うと、今回の旅行を京都にしたのも、この「轍」が目当てだったりするのである。

「どうしちゃったんでしょうね? 盗まれたとか?」

寿々菜が武上を見上げる。

「まさか。美術館から絵を盗むなんて、そんな映画みたいなことあり得ませんよ」

「じゃあ、どうして・・・」

「セキュリティ面で問題でもあったんじゃないですかね。予想以上の人出で、安全を保てないとか」

「ああ、なるほど」

確かに凄い人である。

館長も嬉しい悲鳴を通り越して、本当に悲鳴を上げてしまったのだろっ。

「どうしますか？」

武上は山崎に訊ねた。

てっきり「『轍』が見れないなら、もういいです」と言っと思ったら・・・

「『轍』を見れないのは残念ですが、他の絵がありますから。僕は見て行きます」

どうやら本当に絵が好きらしい。

一方、寿々菜と武上は、一番の目的の絵を見れないということで、（そもそも「轍」の存在もさっきまで知らなかったのだが・・・）肩透かしをくらい、すっかり美術館に興味をなくしてしまった。

「じゃあ、僕と寿々菜さんは、観光に行きますね」

「どうぞ、どうぞ」

武上が心の中でガッツポーズをしたのは言うまでもない。

第3話 追跡

清水寺、寧々の道、高台寺、八坂神社・・・

京都の定番観光スポットを満喫した寿々菜と武上。

武上としては、デート気分を味わいたところだが、高校1年生の寿々菜は24歳の自分のことを、いいお兄さん、としか見ていないことを

武上はちゃんと分かっている。

だから、必要以上に寿々菜に近寄ることはしない。

焦る必要はないさ。

寿々菜さんが高校を卒業した頃に、

今度こそ恋人同士として一緒に旅行でしよう。

見上げた男気で、武上はしっかりと寿々菜の子守をした。

一方寿々菜は、そんな武上の気遣いになど全く気付かず、

観光客が化けた舞妓を本物だと思い込み、一生懸命写真を撮ったりしている。

そんな姿ですら、武上には微笑ましく思える。

「はあ、いっぱい歩いたらお腹すいちゃいましたね」

「そうですね。夕飯は旅館で食べるようになってますけど、まだだいぶ時間があるし・・・」

あそこの喫茶店で、何か甘い物でも食べましょうか？」

そう言つて武上が指差したのは、寿々菜でも知っている超有名な甘味処。

もちろん寿々菜に反対する理由などない。

「あそのパフェって有名ですよね！でも・・・うわあ、すごい並んでる・・・」

寿々菜たちと同じ観光客なのであろう、ガイドブック片手にその店に並んでいる人の列は、歩道にまで長く伸びていた。

「どうします？」

「うう・・・せつだから食べたいです・・・」

「わかりました。じゃあ並びましょう」

「はい！和彦さんのサイン会の時の行列に比べたら、大したことありませんもんね！」

「・・・」

和彦のサイン会ともなれば、何千人、というレベルの行列なので、確かに寿々菜の言う通りなのだが、武上としては同意したくない。

とにかく、2人は列に並ぶことにした。

「あ、あの」

「どうしました、寿々菜さん？」

「ちよつと・・・お手洗いに行つて来ていいですか？」

寿々菜はもじもじして言った。

本当はもう少し前から行きたかったのだが、

寺や神社のトイレはどこも並んでいて、やり過ごしてきたのだ。

ちょうど今並んでいる喫茶店の近くにコンビニがある。
そのトイレを借りようと思ったのだ。

「ええ、もちろん。ここは僕が並んでいます」

「ありがとうございます！」

寿々菜はすぐさま列から外れると、コンビニに早足で向かった。

私と同じことを考えてる人が、少なくとも三人いるんだわ

寿々菜はそう思いながら、コンビニのトイレでも列に並んで、
4番目にようやく目的を果たすことができた。

その後、「何も買わずに出るのは悪いかなあ」と思い、
意味も無くコンビニの中をぶらついた。

そして、アイスクリームケースの中に、さっき武上と並んでいた喫茶店が売り出しているアイスクリームのカップを見つけ、「これでいいじゃない！」とか一人で文句を言っていたのだが・・・

突然、寿々菜の右肩に何か固いものがぶつかった。

「あ。すみません」

寿々菜が振り向くと、見上げるほど大きな男が寿々菜に向かって申し訳なさそうに頭を下げた。

その肩には、なにやら四角くて薄っぺらい黒の鞆がかけられている。「私の部屋に貼ってある、和彦さんのポスターくらいの大きさだなあ」と、

寿々菜は思った。

つまり結構大きな鞆なのである。

どうやら寿々菜にぶつかっただのは、コレらしい。

「いえ、大丈夫です」

寿々菜はそう言いながら、思わず男を見つめた。

本当に大きい人だなあ。

背の高さは和彦さんくらいだけど、

筋肉質でがっしりしてるから、余計に大きく見える・・・

その時、男の肩から鞆の紐の一つがずり落ちた。

男は慌ててそれを肩に掛け直したが、その一瞬、鞆の中身がチラッと見えた。

額である。

そしてその中には絵があった。

あれ？どこかで見たことがある。

寿々菜は首を傾げた。

本当に少ししか見えなかったが、

馬が荷台のような物を引いている絵だった。

そして、その荷台の車輪の跡が地面に描かれていた。

車輪・・・

車輪の跡・・・

・・・轍？

そうだ！「轍」だ！

そう。その絵は、さっき山崎に見せてもらったチラシに印刷されていた「轍」と同じように見えた。

寿々菜がそれに気づき、顔を上げた時にはもう、

男はコンビニから出て行っていた。

間違いない。

あの絵は「轍」だ。

寿々菜は確信した。

寿々菜は、和彦と一緒に趣味で（？）探偵まがいのことをやっている。

和彦は主演ドラマの「御園探偵」みそのたんていで鍛えた推理力で、いくつか事件を解決しており、そのことについては武上も一目置いている。

そして寿々菜は、推理という点ではからっきしダメなのだが、何故か直感が優れており、和彦の推理の手助けをしているのだ。

直感には少し自信がある。

和彦もそれは認めてくれている。

寿々菜は、男が持っているのが「轍」だ、という直感を信じ、急いで男の後を追いかけた。

第4話 迷い子 寿々菜

どこに行くんだろう

見ず知らずの街で、人を尾行するのは難しい。

何が難しいかというと、

ただついて行くだけなら簡単なのだが、

自分が今どこにいて、どうやって戻るのか、が難しい。

だが寿々菜はそんなことは全く考えず、

とにかく男の後について歩き、バスに乗り、

バスを降りるとまた男の後を歩いた。

その結果。

当然、寿々菜は帰り道が分からなくなったのだが、

自分が迷子だということにすら気付かず、尾行を続けた。

そして、ようやく男は目的地についた、らしい。

そこは2階建ての、オンボロという名にふさわしい、アパートだった。

しかし男はアパートの部屋には入らず、

その脇のこれまた古ぼけた物置へ向かった。

「轍」が、理由も伏せたまま突然公開中止になって、あの男が「轍」を持っているってことは・・・

寿々菜は小さな頭で考えた。

この場合の「小さな頭」というのは、そのままでの意味でもあり、比喻でもある。

もしかして、あの男が盗んだのかしら？

だが、さすがに寿々菜でも、盗んだ絵をこんな風に歩いて持ち運ぶというのには疑問を感じた。

でももしかすると、敢えて警察の目を欺くために、こういう方法で運んでいるのかもしれない。

そう思った時、寿々菜はようやく武上のことを思い出した。そしてついでに、今自分がどこにいるのか分からない、ということも思い出した。

でも、今はとにかく絵だ！

寿々菜は、男が物置に入り、そしてまたすぐに出てきたのを、少し離れた電柱の影から見ていた。

物置から出てきた男の手には、さっきの四角い鞆はもうなかった。

ということは・・・

寿々菜は、男がアパートの二階に上がり、一番奥の部屋に入ったの

を確認すると、
そつと物置に近づいた。

まさか、鍵がかかってないなんてことは・・・

ガチッ！

やっぱり、鍵がかかってる。
ってことは、この中には大事な物が入っているのね！

大事な物が入っていないくても、物置に鍵くらいかけるだろう、
と突っ込んでくれる和彦がいないので、
寿々菜はますますさっきの絵が「轍」であるという確信を強めた。

これは事件だわ！

寿々菜は物置を離れ・・・
とにかく来た道に戻った。

「お世話になりました」

武上が深々とお辞儀すると、

関西弁の警官は敬礼をしながら「とんでもありません」と言った。

「・・・ごめんなさい、武上さん」

しょんぼりする寿々菜。

「いいですよ。とにかく無事でよかったです」

「はい・・・本当に、ごめんなさい」

実は武上は死ぬほど心配していたのだが、

寿々菜にこうも落ち込まれると、文句も言えない。

男のアパートからなんとか自力で武上のところまで戻ろうとした寿々菜。

が、ますます迷う一方で、ついに諦めて武上に電話した。

しかし自分の居場所がわからないので、武上に迎えに来てもらうこともできない。

そこで仕方なく武上は、とにかく交番を探して行くように、と寿々菜に指示し、

寿々菜をそこで保護(?)してもらい、武上もその交番に駆けつけた、という次第である。

「でも、どうしてこんなところまで来たんですか？」

「はい、実は、」

寿々菜は、コンビニで「轍」らしき絵を持った大きな男を見つけ、その後をつけていたことを武上に説明した。

「確かに『轍』だったんですか？」

「はい。多分」

武上は腕を組んだ。

武上も寿々菜の直感の鋭さは知っている。
加えて、寿々菜の主張を否定したくない、という気持ちもある。

だがここは京都。

武上の管轄外、どころの話ではない。

それこそ交番にとどけるか、
京都府警に連絡を入れるか。

しかしそれ以前に、
やはり寿々菜が見たのが本当に「轍」かどうか調べた方がいい気がする。

だけど、どうやって？

「寿々菜さん。その男のアパートの場所はわかりますか？」
「はい！それはちゃんと覚えてます！」

寿々菜は胸を張った。
だが、覚えていると言っても、寿々菜のことだから1時間もすれば忘れてしまっだろう。

これは急いだほうがいい。

武上は決心して山崎に電話をした。

第5話 汚れた絵画

「あのね。僕は確かに絵が好きだけど、鑑定人じゃないんです」

武上から突然呼び出しを食らった山崎が、慚然として言った。

「しかも、『轍』の本物はもちろん、きちんとした写真も見たことないんですよ？」

本物がどうかなんて、分かる訳ないじゃないですか！」

ごもつともである。

しかし、今は他に手がない。

「とにかく、一度見るだけ見てください」

武上は食い下がった。

そして、武上に寿々菜をモノにしてもらいたい山崎としては、武上の頼みを無碍に断る訳にもいかず・・・

「見るだけですょ？本物がどうかなんて、断言できませんから」

と、渋々承諾した。

今、寿々菜・武上・山崎の3人は、寿々菜の記憶を頼りに、先ほどの大男の家へ向かって歩いていった。

あれからまだ30分しか経っていないのに、既に寿々菜の記憶は曖

味である。

武上の「1時間」という見込みは甘かったようだ。

「寿々菜さんが見た絵が、『轍』の模写、という可能性はありますか？」

武上が歩きながら山崎に訊ねる。

「一応ネット上では、誰かが撮った『轍』の写真が公開されてるの
で、

模写できなくはないと思います。でも、そのネットの写真は僕も見
ましたが、

かなり荒い写真で、完璧な模写は難しいと思います」

「ということは逆に、仮に模写だとしても本物かどうかの鑑定は難
しいということですね？」

ネットの荒い写真と見比べた位じゃわからないでしょうから」

「そうですね。『轍』の画家は無名で他に有名な作品もないから、
本物の『轍』を見たことのある人間にしか鑑定できないでしょう」

そうは言いつつ、山崎は、

「でも模写なら、さすがにそうと分かるだろう」と、
思っていた。

よほど優れた腕の持ち主でなければ、
ネット上の写真を模写した絵など、たかが知れている。

しかし、そう言っておきながら、もし本物が模写か区別がつかなけ
れば、

武上はともかく、寿々菜に馬鹿にされるかもしれないと思うと、

山崎も言い出しかねたのだ。

とにかく、スウが偶然見たという「轍」を見てからだ。

山崎は頭の中に、パソコンで見た「轍」の写真と、F美術館のチラシに印刷された「轍」の一部を思い描き、予行練習をした。

寿々菜の記憶が消えるのと、大男の家に辿り着くのと、どちらが早いか武上はヤキモキしたが、

なんとか無事に目的地に辿り着く事ができた。

と言っても、歩き始めて既に2時間以上が経過し（！）、
「無事に」と言っているのかどうかは大いに疑問が残るが、そこは優しい武上。

笑顔で寿々菜に「ありがとう。よく覚えててくれましたね」と、
労いの言葉をかけた。

「はあゝ。間違いなくここです！こんなアパート、他にありませんから！」

寿々菜は胸を張った。

まあ確かに、ここまでオンボロなアパートはそうそうないだろう。

武上と山崎は、

昭和何年に建てられたのか全く不明な木造2階建てのアパートを見

上げながら、ため息をついた。

が、

「で、スウ。絵のある物置は？」

山崎は、待ちきれずに訊ねた。

もしスウの目が確かなら、今から本物の「轍」を目の前で見られるのだ。

山崎が心踊らないわけがない。

「アパートの裏にあります。あ、でも、さっきは鍵がかかってました」

「そんなもの、壊せばいい」

「山崎さん！器物破損で訴えられますよ！」

武上が焦る。

「でも、物置を開けないことには、絵も見れませんし」

「そうですけど・・・」

困った。

大家に連絡すれば、物置を開けてもらえるだろうか？

でも、その物置が大男個人の持ち物なら、

大家でも無断で開けられないかもしれない。

だが、武上の心配は杞憂に終わった。

なんと、物置には鍵がかかっていなかったのだ。

「あれ？さっき私が確かめた時は、確かに鍵がかかったのに・・・」

寿々菜が首を傾げる。

「スウのことだから、大方扉を押したり手前に引いたりしたんじゃないのか？」

物置の扉は、横に引くんだ」

「それくらい、私だって知ってます！」

山崎の嫌味に憤然と言い返した寿々菜だが、よくよく思い出してみると、「もしかしたら、押したかも・・・」と、曖昧である。

「まあまあ。もしかしたら大男がまた物置を開いて、鍵を掛け忘れたのかもしれませんが。」

とにかく、中を見てみましょう」

武上に言われるまでもなく、山崎が物置を開く。もちろん、扉を横に引いて。

そして、そこには・・・

「うわあ！」

「なんだ、これは」

「すごい・・・」

3人は思わず息を飲んだ。

なんと物置の中には、絵のキャンバスらしき物が所狭しと置かれてい

ただ。

だが、雑然として見えるものの、どのカンバスにも丁寧な袋がかけられ、

大切に保存してあるようだ。

そしてその真ん中に、見覚えのある黒い鞆に入ったカンバスがあった。

「あ！これです！この中に、さっき『轍』が入っていました！」

寿々菜が勢いよく声を上げる。

山崎は、しばらく呆然と物置の中を見回していたが、寿々菜の声で我に返り、そのカンバスに近づいた。

武上は、さすがに周囲の様子になり、

物置の中には入らず、外で人が来ないか見張っている。

それでも、やはり気になり、チラチラとカンバスへ目を向けた。

「よ、よし。じゃあ、鞆を開けるぞ」

山崎が緊張しながら黒い鞆に手をかけ、持ち手の部分を左右に割る。

すると、鞆はパカッと二つに分かれて、するすると床に落ちた。

「これは・・・」

山崎は、言葉をなくした。

素晴らしい。

本物の「轍」かどうかは、分らない。

でも、とにかく素晴らしい絵であることには違いない。

筆使いといい、色使いといい、構図といい・・・

全て一流と言っている。

「どうですか？」

武上が外から声をかける。

山崎はゆっくり振り返り、武上に向かって頷いた。

「おそらく・・・本物だと思います」

武上が目を見開き、寿々菜が「やっぱり！」と喜んだような声を上げる。

ここに「轍」があるということは、

美術館から盗まれたということなので、喜ぶのも変な話だが・・・

とにかく寿々菜は、自分の直感が間違っていなかったことに喜んだ。

和彦さんがいなくても、私、少しはやれるんだ！

これなら、もっと和彦さんの役に立てるかもしれない！

本来なら寿々菜の手柄など、山崎としては面白くないことだが、とにかく今は、山崎も目の前の「轍」に唖然としている。そして・・・更に山崎を驚かせることがあった。

「あ！こ、これは・・・！ひどい！」

「どうしました？・・・あ」

寿々菜も山崎の後ろから絵を覗き込んで声を上げる。

「これ・・・水、ですか？」

「みたいだな」

山崎は絵の下半分にそつと右手で触れた。

そこは、水か何かがかけられ、絵具が滲んでしまっている。

「・・・まだ湿っている。ついさっき、汚したんだろう」

「ひどいですね・・・この絵、どうなっちゃうんですか？もう、価値はないんですか？」

「なくはないけど、大幅に落ちることは間違いないね」

山崎はため息をついた。

第6話 悲鳴

カコーン……

「いい湯だったなあ、ハハハ、いい湯だったなあ、ハハハ」
「おつ。兄ちゃん、歌うまいなあ」

「そうですか？ありがとうございます」

「それに、ええ男だな。あれ？兄ちゃん、どっかで見たことある気がするなあ？」

「よく言われます。どこにでもいる顔なんで」

「ははは、そーやな。最近の若いモンはみんなおんなし顔に見えるわ」

「ですよー」

カコーン……

和彦が温泉を満喫している頃。

寿々菜、武上、山崎は、胃を決して大男の部屋へ向かっていた。

「スウ。『胃を決して』じゃない。『意を決して』だ。
お腹でもすいたのか？」

「だつてえー」

「寿々菜さん。これが終わったら、旅館で夕食にしましょう」
「はい！」

本物の「轍」らしき絵を発見したのだから、

この時点でもう地元警察に任せてもいいのだが、

刑事の武上はもちろん、和彦の名探偵振りに感化されている寿々菜と山崎も、

大男がどうやって「轍」を美術館から盗んだのか興味がある。

捕まってしまえば直接話を聞く機会もないだろうから、

「職務質問」にかこつけて、大男に面会しようというのだ。

そして、実は山崎にはもう1つ気になることがある。

さっきの物置の中の沢山の絵。

「轍」以外にも盗んだものばかりかもしれないが、
どうも見覚えがある気がする。

大変有名な絵・・・という訳ではない。

「轍」以外はどれも同じ画家の絵らしく、似た雰囲気を持っている。
あの絵のタッチ。どこかで見たことがある。

だが、思い出せない・・・

「この部屋で間違いありませんね？」

「はい！」

2階の一番奥の扉の前で武上が訊ねると、

寿々菜が元気良く頷いた。

間違いないも何も、一つの階に2世帯しか住めないので、

こっちにいなけりやもう一方の部屋、というだけの話であるが。

表札は出ていなかったが、部屋に電気がついているので、誰かはいるようである。

更に驚いたことに、インターホンすらついておらず、武上は仕方なく、古ぼけた扉をドンドンと叩いた。

「すみません、」

警察です、と言うべきか？

これがガサ入れなら、もちろん「警察だ」と言うのだが、今回はそうではない。

もつと言つと、正規の職務質問でもない。
更に言つと、武上は休暇中である。

「・・・すみません、武上と申しますが」

寿々菜と山崎は危うくずっこけそうになった。

「はい」

中から男の声がする。

それを聞いて寿々菜が武上の腕を握った。

この声！絵を持っていた男の声です！

寿々菜が目で武上にそう言つと、武上も頷いた。

扉がそつと開く。

そして、その隙間から・・・

ナイフが見えた！

武上は慌てて寿々菜の前に立ち、足を踏ん張った。

「はい、どちら様ですか？」

ナイフに続いて男が顔を出す。

間違はなく、寿々菜がコンビニでぶつかった、「轍」を持っていた大男だ。

武上が、少し青い顔で男を睨んだ。

と、男も自分の手の中の物に気がつき、

「あ。すみません。飯作ってたんで」

頭を掻きながら、ナイフ・・・包丁を引っ込めた。

3人が同時に息をつく。

驚かせるな！

「何の御用ですか？」

「あ、えっと」

武上は男を見て、拍子抜けしてしまった。

寿々菜が「大男だ」と言っていたし、「轍」を盗んだ犯人である可能性が高い。

だから武上は、いかにも凶悪犯らしい男を想像していたのだが、目の前の男は、とても凶悪犯には見えない。

確かに大きいし、目つきも悪い。

だが、どこか人の良さそうな男である。

歳は、武上と同じくらいだろうか。

「少し、お伺いしたいことがあります」

「そうなんですか。どーぞ、どーぞ。散らかってますけど」

男は何の警戒もせず、3人を家に上げた。

が。

『武上さん』

『はい』

寿々菜は、聞こえるか聞こえないくらいの小声で武上に話しかけた。

武上も、寿々菜に負けず劣らず小さな声で返事する。

『どうしてあの人、忍び足で歩いてるんですか？自分の家なのに』
『さあ・・・』

家の主が、抜き足差し足忍び足、をやっているのでは、客である寿々菜たちも、それに従わざるを得ない。

自然、声も小さくなる。

もしかしたら、やっぱりこの男は凶悪犯で、家の中に、無線が仕掛けてあるのかもしれない。それを通して、外にいる仲間に「警察が来た！」と知らせているのかも。

武上は、銃を持っていないことを後悔した。

抜き足差し足忍び足でもギシギシいう古い廊下の突き当たりの扉を開き、

男が小声で「どうぞ」と言った。

武上は用心しながら中に入る。

そこはどうやら居間と台所のようだ。

そして、居間の横に閉じられた襖があり、その奥にもう1部屋あるらしい。

もしかして、あの奥の部屋に仲間が！？

武上の心配をよそに、

相変わらず音をたてないように男が3人にお茶を出してくれた。

そして、やはり武上の心配をよそに、寿々菜と山崎は遠慮なくお茶を頂く。

「お！・・・おいしい・・・」

寿々菜が小声で感動する。

男は笑顔で頷き、同じく小声で訊ねた。

「武上さんでしたっけ？何の御用です？」

武上は、気を取り直して早速本題に入ろうとしたが、重要なことを思い出した。

「・・・すみません。その前にお名前を伺っていいですか？」

訪ねて来ておいて、相手の名前も知らないなんて、怪しいことこの上ないが、

男はまたもや警戒なんぞしようとも思わないようだ。

「え？ああ、俺は、」

男が名前を言いかけた、その時！

「ぎゃあああああ！！！！」

居間の奥の部屋から、けたたましい悲鳴が聞こえてきた。

第7話 解決？

奥の部屋からの悲鳴に、男の顔が強張る。

が、一番最初に行動を起こしたのはさすがに武上だった。

武上は、悲鳴に驚き固まる寿々菜と山崎を残し、パツと立ち上がると、奥の部屋へと続く襖を勢い良く開いた。

男も我に返ると、慌てて武上の後に行く。

それを見て、寿々菜と山崎もようやく立ち上がった。

そして、4人が奥の部屋で見たものとは・・・！

「うわあああああゝん！」

「あーあ。起きたか」

男が苦笑いしながら、奥の部屋の布団の上で泣きじゃくる5歳くらいの男の子を抱っこした。

「つて、うわ！オネシヨしてやがる！」

「うわああゝん・・・ごめんなしい」

「ごめんなしい、じゃない。ったく」

男は、ちよつと情けないような笑顔で、武上たちを見た。

「すみません。少し待っててもらえますか？」

「は、はあ・・・」

武上たち3人は、ポカーンとその場に立ち尽くしたのだった・・・

「失礼しました」

「い、いえ・・・」

完全に肩透かしを食らった武上は、
脱力してお茶をすすった。

「ほら、大和^{やまと}。挨拶しろ」

お風呂で身体を洗ってもらってスッキリしたらしい男の子は、
男に促され、

「吉沢大和^{よしざわやまと}！2歳です！」

と言った、いや、叫んだ。

耳の奥が痛くなるほど、大きな声だ。

ちなみにもう、男も小声ではなく普通の声で話している。

「あ。俺も自己紹介がまだだったな。吉沢です。
この大和は息子です」

言われなくても分かる。

目つきの悪さは父親譲りらしい。

それにこの2歳児とは思えない身体の大きさ。

間違いなく親子だ。

寿々菜と山崎も続いて自己紹介をする。

「武上さんと、白木さんと、山崎さん、ですね。それで、
「あああ!!」」

またもや吉沢という男の声が遮られる。
ただし今度は、遮ったのは山崎だ。

「吉沢さんって!あの吉沢さんですか!?!」
「は?」

吉沢が首を傾げる。

「どの吉沢ですか?」
「ああああ、そうか!あの絵は!なるほど!?!」
「は?」

今度は、山崎以外の全員が首を傾げる。

「どうしました、山崎さん。頭がおかしくなりましたか?」
「黙りなさい、スウ。この吉沢さんは、有名な画家さんだ」
「へ?」

また山崎以外の全員が首を傾げる。

「い、いや、吉沢さんは傾げないでくださいよ・・・」

「だって俺、有名じゃないですよ？」
「有名です！」

他人事なのに、何故か得意げな山崎。
さすがはマネージャーという職をしているだけはある。
陰で人を支えるのが好きなのだ。
別に山崎が吉沢を支えている訳ではないが。

「武上さん！スウ！この人は、新進気鋭の若手画家で、
巷じゃ吉沢さんの絵は、大変な人気なんです！！」
「へえー」

「下の物置の沢山の絵！あれは、吉沢さんの作品ですね！？」

すっかり興奮している山崎に、

吉沢は「はあ、まあ」と照れくさそうに頷いた。

「やっぱり！どこかで見たことがあると思ったら・・・！そうか、
吉沢さんの絵だったのか！
あの物置、中の絵ごと売ったら一体いくらになることやら・・・」

山崎が1人で興奮して金勘定している間に、
武上は一番大切なことを吉沢に訊ねることにした。

「申し遅れましたが、私は警察です。今話題の『轍』という絵が、
こちらの物置にあるという通報があったので、申し訳ありませんが
勝手に物置の中を見せてもらいました」

敢えて、寿々菜の名前は出さない。
通報者に対する報復、という事件もあるので、
こつという点は警察も気を使う。

「え？『轍』？」

吉沢はキョトンとした表情で武上を見た。

「はい。てつきり吉沢さんが盗んだのかと思ったのですが、今のお話だと・・・」

武上だけでなく、いつもは鈍い寿々菜もさすがに嫌な予感がする。

「あれは俺がネットの写真を見て、面白半分に模写した絵です」

・・・やっぱり。

今度こそ、武上と寿々菜はがつくりと肩を落とした。

「あはは。あんなところに本物の『轍』がある訳ないじゃないですか」

ようやくシヨックから立ち直った武上と寿々菜に、

怒るどころか京都の和菓子を出してくれた人のいい吉沢は、お腹を抱えて笑った。

「ですよね・・・」

「『轍』を模写してみた、って俺のお師匠さんに話したら、見てみたいから持ってきて来い、って言われて、さっき見せに行ってたんです。コンビニで白木さん

と会ったのは、
その帰りですね」

そこでチラッと見た絵を、寿々菜は本物の「轍」と勘違いしてしま
ったわけである。

だが、寿々菜に惚れている武上はもちろん、
寿々菜を目の敵にしている山崎ですら、寿々菜を責めようとしない。

吉沢が描いた「轍」の模写。

本物と勘違いしてもおかしくはない。
これはこれで、いい値がつくだろう。

それでも寿々菜は面目ないといった感じで小さくなっている。

「本当にすみませんでした」

「気にすんなって」

何故か大和に慰められる寿々菜。

「ありがとう、大和君・・・あ。そう言えば大和君、お母さんは？」
「母ちゃんは、シゴトでシュツチョーだって」

いまいち分かっていないらしい。

吉沢が笑った。

「妻が仕事でいない時だけ、保育園に通わせてるんです。さつきも
大和は保育園にいて、

俺は1人で絵をお師匠さんに見せに行っただけです」

「そうだったんですか。そう言えば、どうして絵を汚したんですか

「？」

山崎が訊ねると、吉沢は「え？」と驚いた。

「汚れてました？」

「はい。下半分が、水か何かで汚れてましたけど」

「・・・もしかして」

吉沢は、夢中でお菓子を食べている息子の大和を睨んだ。

「おい、大和。お前、昼寝前に1人で下で遊んでたよな？」

「・・・う、うん」

バツの悪そうな大和。

「物置の鍵、勝手に開けたな？」

「う、うん・・・ごめんよ、父ちゃん」

「それはいい。で、中で遊んだ？」

「うん・・・」

吉沢の目が更に険しくなる。

ただでさえ目つきが悪いのに、もはや悪人にしか見えない。

「お前・・・絵にオシッコかけたな？」

「えへへへ。物置に入ると、なんでかオシッコしなくなっちゃうんだよな」

「だよなー、じゃない!!!」

山崎は思わず、さつき絵に触った右手を見たのだった・・・

第8話 狸狩り

「おー。遅かったな。先に飯食ってるぞ」

疲労困憊の果て、旅館の部屋へ戻ってきた寿々菜たち一行を待ち構えていたのは、

旅館の豪華な夕食・・・を1人で食べている、温泉ですっかりリフレッシュした和彦だった。

「おい。1人で食うのは構わないが、なんで俺たちの分の料理までもう出されてるんだ」

「1人分だけは出せないって言われたから、全員分出してもらっただけだ」

「・・・」

「寿々菜も自分の部屋で1人で食ってもつまんねーだろ？だからこっちの部屋と一緒に食べるようにしてもらった」

寿々菜は和彦のありがたいのかがたくないのがよく分からない心遣いに、

「ありがとうございます」と素直に礼を言ったが、武上はもはや反撃する余力もなかった。

せっかく東京からはるばる京都まで温泉旅行へ来たというのに、勝手に事件を作って大騒ぎしていたのだから。

しかも、その発端が寿々菜では、武上としては文句も言えない。

くそっ！こうなりゃ、「轍」のことなんか忘れてとにかく食って飲

んでやる！

武上はヤケになり、いい感じに冷めた料理と、いい感じにぬるくな
ったビールに手を伸ばした。
が。

「なあ、新聞のこの記事、見てみろよ。面白いぞ」

そう言つて和彦が、武上に新聞を差し出した。
そこには、

「F美術館で『轍』の公開中止！絵が盗まれた！？」
という文字が躍っていた。

「・・・もうこの話はどうでもいい」
「知ってたのか？」

知ってるも何も！！！！

むくれた武上に代わり、寿々菜と山崎が今日の出来事の顛末を和彦
に話して聞かせたのだった・・・。

「あはははは！じゃあ、寿々菜の勘違いで『轍』の模写に振り回さ
れてたのか、お前ら。ご苦労なこつた」
「うるさい！」

武上はビールをあおった。

「まあ、有名な新人画家の絵を見れたんだから、いいじゃねーか。その模写、そんなに似てたのか？」

「本物を見たことがないですから比べようはありませんが、あれはあれで素晴らしかったです」

絵好きの山崎が請合う。

「ふーん。でも、本物の『轍』はどこに行ったんだろっな？」

「和彦。絵は盗まれたと決まったわけじゃない。むしろその可能性は低い」

「なんでだ？」

「考えてもみる。映画やドラマじゃあるまいし、セキュリティの厳しい最近の美術館から

絵が盗まれるなんて、まずあり得ない」

「じゃあ、なんで公開が中止されたんだよ」

「だからそれは、予想以上の人出で、客の安全が保てなかったとか・・・」

「そんなもん、整理券配ったり入場制限したらいい話だろ」

和彦はぴしゃりと言うと、武上の手の中の新聞の記事を指さした。

「だから、それ見ろつつたろ」

「見てるだろ。『F美術館で・・・』」

「違う。その横の、F美術館の館長の写真だ」

「写真？」

武上に加え、寿々菜と山崎も新聞を覗き込む。そこには、いかにも金持ちといった感じの、

そしてお世辞にも人が良さそうとはいえない感じの、男の写真が載っていた。

その隣に、

「理由は申し上げられませんが、都合により『轍』の公開を中止させて頂きます」

と館長のコメントが掲載されている。

寿々菜が館長の写真に見入った。

「この人・・・どこかで見たことがある気がします」

「スウもか？僕もそう思ってた」

「うん。確かに見たことのある顔だな」

3人して考え込むが、一向に思い出せない。

「武上はともかく、スウと山崎は、もう見たくないってくらい見る顔だろ」

和彦にそう言われて、山崎がポンと手を打った。

「社長だ！門野社長とそっくりですね！」

「ああ！ほんとだ！」

そう。

F美術館の館長の写真は、

和彦と寿々菜が所属する門野プロダクションという弱小芸能プロのケチ社長・門野と良く似ている。

「はあー。他人の空似、とはよく言ったもんですね」

「実は双子の兄弟とか？」

和彦が笑う。

「まあ、その可能性もなくもないけどな。苗字も違うし、多分、赤の他人だろ。」

でも、その手の顔をしてる人間にろくな奴はいない。決まってる」

勝手に自分の人間性を決められたのではF美術館の館長もたまったもんじゃないだろうが、

少なくとも門野社長については、毎日のように会っている和彦が「ロクな奴じゃない」と言うのだから、

間違いあるまい。

「そーゆー顔の奴は、金に鼻が利くんだ。『轍』の公開なんて儲け話、みすみす逃すはずがない。」

1人残らず全部の客から入館料せしめるだけじゃなく、

『轍』を展示してある部屋に入るのに特別料金が必要、とか言い出したってゆーならともかく、

入館前にご丁寧に『公開は中止する』つつつて、客を追い返すなんて考えられない」

「・・・」

武上は、いつに増しても自信たっぷりの和彦を見て、門野社長の人間性を改めて思い知った。

「どうもこの話には裏がある気がする」

「裏、ですか」

何故か嬉しそうな寿々菜。

懲りもせず、こういうことに首を突っ込むのが大好きなのだ。

和彦はグラスを空けるとニヤツと笑った。

「じゃあ一つ、狸狩りに行きますか」

第9話 大混乱

翌日のテレビは「轍」一色だった。

前日にも、F美術館で突然「轍」の公開が中止されたことは報道されていたが、

そこまで大きな注目を集めた訳ではなかった。

別に「モナリザ」の公開が中止されたのではなく、

最近少し話題の絵の公開が中止になったただけなのだから。

ところが今度はそうは行かない。

なんと、理由の説明も無く突然公開中止となった「轍」が、

その翌日の早朝に、F美術館の門の前にボンと置かれていたのだ。

それを見つけたガードマンは慌てて館長に連絡したのだが、

館長が駆けつけるより早く、何故かマスコミが駆けつけ、あたり一面騒然となった。

リポーターはしきりに「昨日、公開中止となった絵が、突然美術館の前に姿を現しました！」と、カメラに向かって叫んでいる。

館長は大慌てで絵を館内に持ち込み、展示し、

テレビを見てやってきた大勢の客、というより、野次馬を館内へ入れた。

もちろん入館料を取ることは忘れない。

そしてマスコミに対し、実は噂通り絵が盗まれていたため展示ができなかったこと、

それが何故か今朝突然戻って来たことをしどろもどろになりながら説明した。

そんな激動の午前を過ごした館長が、フラフラになりながら館長室へ戻ってきたのは、もう昼過ぎのことだった。

「全く！何がどうなっているんだ！」

大きな革張りの椅子に、強引に身体を押し込みながら愚痴を漏らす。椅子の悲鳴など、耳に入りもしない。

テレビに目をやると、青い顔をした自分の画えと、美術館で「轍」を見たばかりらしい自称・評論家が「素晴らしかった！」と興奮している画が、

交互に流されていた。

しかもそれだけでは間が持たないのか、

ご丁寧に前の持ち主である資産家のインタビューまで撮りつけ、報道している。

こんなことをした奴は、一体どのどいつだ！？

見つけたら、ただじゃおかenないぞ！

それに・・・

館長は右手で顎の下をなでた。

絵を発見したガードマンは、

「自分は館長にしかご連絡していません！」と、言っていた。どうやらマスコミには匿名でタレ込みがあったようなのだ。

誰が何のためにそんなことをしたんだ？

絵を門の前に置いた奴が、自分でマスコミに話したのか？

どうして？単に目立ちたかったのか？

・・・いや、今はそれどころじゃない。

館長は部屋を出ると、大きな身体を精一杯小さくし、目立たないように駐車場へと向かった。

館長が自分で運転する車は、京都市内を抜け、山へと向かった。

秋には紅葉で知られる有名な山だが、

今の寒い季節は比較的ひっそりしている。

特に、館長の車が止まったロジ風の別荘の周りは、しんとしていてまるでひとけがない。

館長は急いで車を降り、鍵を使って別荘の中へ入った。

そしてリビングへと続く廊下の途中にある扉を開けると、下へ伸びる階段が現れた。

地下のワインセラーへ下りるための階段だ。

館長はそれをドスドスと下る。

一段下りるごとに空気が冷たくなっていったが、館長は汗をかいていた。

まさか・・・まさか・・・いや、そんなはずは・・・

階段を下りきり、洞窟型のワインセラーの中をつつきる。

このワインセラーは別荘を建てる時に一緒に造ったものだが、特にワインの趣味があつた訳ではない。

流行に乗って造ってみただけだ。

お陰で沢山の棚の上にあるのは数本の安いワインだけ。

そんなワインセラーの一番奥で館長は足を止めた。

目の前には、白い布がかけられた四角い物が壁に立てかけられている。

館長はその白い布をそつとめくり、中を確認した。

・・・ある！どういうことだ！？

その時、突然後ろから声がした。

「おー。立派なワインセラーだな。でもここは、絵を置いとく場所じゃないぞ」

「！？」

館長が驚いて振り向くと、そこには3人の男と1人の少女が立っていた。

今自分に声をかけたのは、一番前に立っている若い男らしい。が、この男。どこかで見たことがあるような・・・

その男が言葉を続けた。

「勝手に入ってきて悪かったな。後をつけさせてもらったぜ」

「な、なんだ、お前達は!？」

「うーん。探偵と警察、ってとこかな」

後ろの男が、ズボンのポケットから警察手帳を取り出しチラッと見せた。

ラフな格好をしているが、どうやら本物の警察らしい、ということ
は、館長にもわかった。

館長は真っ青になったが、何とか虚勢を張る。

「だから、なんだ!私は何もしていないぞ!!」

「まだしてない、ってだけだろ」

一番前の男・・・もちろん、和彦である・・・が、
館長の後ろにある物を、顎でしゃくった。

「それが本物の『轍』なんだろ？」

「!!!!」

館長は後ろの物を隠すように身体的位置をずらしたが、
山崎がそれを押し退け、白い布を一気にめくった。

とたんに、本物の「轍」と思しき絵が現れる。

ただ、ワインセラーの中は暗い。

山崎は絵の前にかがみこみ、絵をじっと見つめ始めた。

「和彦さん、どういことなんですか？」

寿々菜が和彦に訊ねる。

「簡単なことさ。この館長さんとやらは、『轍』に保険をかけてたんだ」

「保険？生命保険みたいなものですか？」

「まあそうだけど、どっちかってゆーと、家財保険に近いかな。」

絵が盗まれたり傷つけられたりした時に、金がおりの保険つてのがあるんだよ」

「へえ・・・」

人間の私でさえ、保険なんて入ってないのに！

変なところで絵に対抗意識を燃やす寿々菜である。

「こいつは、その保険金を手に入れるために『轍』を盗まれたことにしたかったんだ。」

でも、絵の持ち主である自分が『盗まれた！』と騒いでも保険会社は疑って金を出さないかもしれない。

だから理由を言わずに『轍』の公開を突然中止して、一方で『盗まれたらしい』という噂を流す。

その噂が広まってから保険会社に盗難の申請をすれば、受理されやすくなるからな」

「なるほど」

武上が頷く。

「保険金を受け取って、更に絵を裏ルートで売れば、二重の儲けになる」

「ああ。長い目で見れば、絵を美術館に展示して入館料で儲ける方

「が得だろうが、
どうせ女がギャンブルで急に金が必要になったんだろ」

館長は考えていたことを全てズバリと言い当てられ、青くなつたま
ま何も言わない。

しかし、館長を更に青くさせる一言が、絵を見ていた山崎により発
せられた。

「和彦さん」

「ん？」

「この絵、偽物です」

第10話 源流

「はぁ？偽物？」

和彦の顔が歪む。

「はい。一見『轍』に見えますが・・・違いますね」

山崎は自信があつた。

パンフレットやネットで見た「轍」と似てはいる。
だがしっかり見ると、完全に素人の仕事だ。

「おい、門野社長、じゃなかった、狸、じゃなかった、おっさん」

もはや誰のことを言っているのかよくわからないが、一応フォローしておく、

館長のことを言っているのである。

「し、知らん！私は知らん！！」

「この期に及んで言い逃れしようなんて考えない方がいいぞ」

「そうですよ、館長さん」

キレ気味の（いや、キレている）和彦を制して、武上が前に進み出た。

「まだ、警察にも保険会社にも盗難届けは出してませんよね？」

適当な理由をつけて、早く本物の『轍』を展示して下さい。今ならまだ何の罪にもなりません」

「だから！確かに私は絵を隠して、盗まれたことにしようとは思っ

ていた！それは認める！

だが、ここに本当に本物を置いておいたんだ！」

和彦と武上は顔を見合わせた。

館長が嘘をついているようには見えないし、

計画がばれている以上、絵を隠しても仕方ない。

ということは・・・

「館長がここに置いてあつた絵を、誰かが本当に盗んだってことか？」

武上が呟く。

「だろーな。おい、おっさん。荒らされたような跡はあるか？」

「な、い、と思う」

館長はまだ真つ青のままだ。

「頼りねーなあ。でも、そうだとすると、犯人は普通に鍵を使ってこの家に入り、

『轍』を持ってつたってことか」

「そうなるな」

「おっさん。この家の鍵は、他に誰が持つてる？おっさんの家族とかか？」

「・・・」

何故か黙り込む館長。

和彦にはその理由が分からなかったが、
数々の犯罪者を相手にしてきた刑事の武上にはピンと来るものがある

った。

「誰も持つてないんですね？」

「・・・」

「ご家族、つまり奥様ということですが、奥様もこの別荘の鍵を持つていない。」

「そもそも、この別荘の存在も知らない。そうですね？」

「・・・」

和彦が呆れたように「ははくん」と言った。

「ここは女を連れ込むための別荘って訳か」

「・・・この家のことは、家族には・・・」

「んなこた、どーでもいいんだよ。じゃあ、本当に鍵を持つてるのはおっさんだけなんだな？」

「あ、ああ。そうだ！合鍵なんかもない！」

このおっさんのことだから、寝てる間に女にこっそり合鍵作られてもわかんねーだろうな

和彦はそう思ったが（ちなみに武上も思った）、そこを追求しだすと切りがなさそうなのでやめた。
とにかく、誰かがどうにかしてこの家に入り、本物の「轍」を持ち去ったことだけは確かなようだ。

しかし。

「・・・和彦さん」

寿々菜が偽物の「轍」から目を離さないまま、和彦を呼んだ。

「どうした？」

「・・・何か、ちょっと・・・」

「お。来たか」

寿々菜は頷いた。

昨日は寿々菜の直感、というか勘は外れたが、今日のこの違和感は・・・間違いない。

いつも事件が起きた時に感じる、あの違和感だ。

なんだろう？あの絵。

何か凄く違和感を感じる。

「どんな感じの違和感だ？」

「えっと・・・あの偽物の絵・・・誰が描いたんでしょうか？」

「は？」

寿々菜はようやく絵から目を離し、和彦を見た。

「『轍』が欲しいなら、盗むだけでいいですよね？どうしてあんな偽物を用意したんでしょうか？」

「・・・なるほどな」

言われてみればその通りだ。

「轍」が本当に盗まれたということに館長が気付くのを遅らせたかったとしても、

わざわざ絵を描いてまで偽物を準備するだろうか？

山崎でも素人が描いた物だとすぐに分かったのだ。

盗難に気付くのを遅らせる方法としては、手が込んでいる割に意味がない気がする。

それなら、同じような大きさの白いカンバスに布を掛けておくだけでもいいのではないだろうか。

「おっさんが、最後に本物の『轍』を見たのはいつだ？」

「一昨日、ここに運び込んだ時だ」

「・・・ふーん」

「ほ、本当だ！」

「誰も嘘だとは言ってねーだろ。ついでもう1つ質問だ。

おっさん、実は絵に興味なんてねーんだろ？金になるから好きなか
けだろ？」

聞くまでもなくそうだろうが、

和彦は思うところがあり、念のため確認した。

「い、いや、その・・・私は絵には余り詳しくなくて・・・」

和彦はため息をついた。

やっぱりな。

つまり・・・なるほど、そーゆーことか。

「よし、こーなりやとことん付き合ってやる。おい、武上」

「なんだ」

「源流まで遡るぞ」

「源流？」

「ああ」

和彦は、いつの間にやら床にへたり込んでいる館長の胸倉を掴んで立ち上がらせた。

「おっさんにも、付き合ってもらっからな」

第11話 今度こそ本物？

和彦は正直、

「付き合つとは言ったが、北海道だとか言われたらどうしよう」と思っていた。

だがその心配はなかった。

目的地は、同じ京都府内、それも今いる館長の別荘から比較的近い場所だった。

和彦、寿々菜、武上、山崎、そして強引に付き合わされた館長の5人は、

館長の後をつけるために武上が借りたレンタカーで、目的地に無事到着することができた。

「ここか？」

車から降りた和彦は、目の前の大きな家を見上げながら館長に訊ねた。

「そうだ。野本さんという人のお宅だ」

確かに、表札には「野本」とある。

それにしても、大した家だ。

何百坪あるかもしれない大きな土地に、デンと作られた洋館。庭には噴水まである。

個人の家にはとても見えない。

寿々菜と武上と山崎は、ここに来た目的もわからないこともあり、この大邸宅に気後れしていたが、さすがは和彦。

なんの躊躇いもなくインターホンを押した。

「・・・はい」

インターホン越しに女性の声がした。

和彦は、無意識のうちにKAZUモード・・・つまり、爽やか若手俳優モードに切り替わり、愛想のいい声を出した。

「岩城と申します。突然申し訳ありません。

『轍』という絵のことで、ご主人にお伺いしたいことがあって参りました」

武上は、いつもならがの和彦の二面性に呆れ、

館長は、「誰だ、こいつ!？」といった感じでギョツとしている。

寿々菜と山崎は・・・

「この和彦さんも素敵」と言わんばかりにポーっとなっているのは言うまでもない。

女性は「少々お待ちください」と言い、通話を切った。

そして、5分ほどすると再びインターホンから「どうぞ」と同じ女性の声がし、

自動で大きな門が開いた。

おそらく女性はこの家の使用人か何かで、家の主人に、突然の客を招き入れてよいかどうか、確認を取ってい

たのだろう。

家の玄関の前に立つと、待っていたかのように中から扉が開いた。そしてその扉の向こうにいたのは、先ほどの使用人ではなく、貫禄のある長身の老人だった。

一目でこの家の主人だとわかる。

寿々菜はその老人を見て、「どこかで見たことのある人だわ」と思っただけだが、

武上にはすぐにわかった。

昨日テレビで見た、「轍」の前の持ち主である。

確か、この老人の家の古い倉庫から「轍」が発見され、価値ある絵だ、ということと話題になったのだ。

「お久しぶりです、野本さん」

館長が卒なくお辞儀をする。

「ああ、お久しぶりですな。そちらの方々は？」

「はあ、あの・・・」

館長としては、何と説明していいものやら困るところだ。代わりに和彦が答える。

「館長のトモダチです。」

館長が、『轍』のことでも野本さんに聞きたいことがあるから一緒に来て欲しい、

と言うので、大勢で失礼かとは思いましたが、伺わせて頂きました」

そんなこと、一言も言っていない！！

館長は和彦を睨んだが、和彦はどこ吹く風。

一方、野本氏は少し照れたように笑った。

「ははは、やはり気付かれましたか。さすがは美術館の館長さんですな」

「は？はあ・・・光栄、です」

何を褒められたのか分からない館長。

そして、そんな館長をまたもや無視して和彦が野本氏に向かって言う。

「『轍』はあなたが描いた絵ですね？」

「ええ！？」

和彦と野本氏以外の全員が、驚きの声を上げた。

「はい、そうです。いやあ、あんな下手な絵で、お恥ずかしい」「いえ、いい絵だと思いますよ」

お世辞など和彦なら絶対に言わないが、KAZUにとっては得意分野である。

「絵を描くのが好きなんですけど、どうも下手でして。でも、あの『轍』は、私が今まで描いた絵の中では一番の出来でした。」

それで、知り合いに『いい絵がある』と言ったんですが・・・」

金持ちの知り合いは金持ち、とても言うか。

噂にたちまち尾びれや背びれがつき、いつの間にか、

「野本氏の家に、たいそうな価値の絵があるらしい」という噂が上流階級連中の間に広まった。

そして世間でも話題になり始め、「轍」の価値は勝手にどんどん吊り上げられていった。

こうなると、野本氏も今更「あれは私が趣味で描いた絵です」とは言い出しにくく、

一方で周囲から「一目でいいから『轍』を見せて欲しい」と言われ、困っていた。

仕方なく携帯でわざと分かりにくく撮った「轍」の写真を友人に送ったら、

それがネットに流出し、ますます「轍」の話題は過熱する始末。

もはや野本氏には手の打ちようがなかった。

そこへF美術館の館長が「『轍』を買い取りたい」と言ってきた。しかも館長は「轍」を見るや否や、「素晴らしい！」と高値を提示した。

野本氏としては、金を渡してでも「轍」を引き取って欲しかったので、

渡りに船とばかりに「画家は不詳ですが」と言っ、館長に「轍」を売ったのだった・・・

「ま、この館長殿なら、素人の描いた絵かどうかなんて、わかんなかったんだろーな。

とにかく、高額を保険をかけてもおかしくない程度に有名な絵ならなんでもよかった訳だし」

和彦がチラッと横目で館長を見ると、
館長はしきりに、広い額に光る汗を拭いている。

「じゃあ、『轍』は盗まれたわけじゃなかったんだな？」

武上がため息をつく。

「そうだ。館長の別荘に隠してあったあの絵こそ、正真正銘『轍』だ。

パンフレットにはばかした絵の写真しか載せてなかったから、
素人作品かどうか誰の目にも分かんなかったんだろ。

ちゃんとした写真なら、山崎みたいになんと絵を見れる奴には素
人作品だと分かるはずだ」

山崎がさっき館長の別荘で、本物の「轍」を見て「偽物だ」と言っ
たのも頷ける。

山崎だけでなく誰もが、「轍」はもつと素晴らしい絵だと思い込ん
でいた訳なのだから。

館長の詐欺計画を未遂に終わらせられたのはよかったとして・・・
こんなに疲れる事件はない！

武上は、さっさと旅館へ戻って温泉へ入ろうと心に決めた。

第12話 母ちゃん

「え？もらっちゃっていいんですか？」

吉沢は、目を丸くした。

有名な画家の、もはや値段もつけられないような絵を「やる」と渡されれば、そりゃ驚くだろう。

「昨日の夜中に無理言って、『轍』の模写を修復してもらったお礼です」

武上は言った。

今朝、F美術館の門の前に置かれていたのは、吉沢が模写した「轍」だったのだ。

置いたのは言うまでも無く和彦、に命令された山崎である。

隠したはずの「轍」が突然現れれば、館長は慌てて本物の「轍」の所へ飛んで行くだろうから、

その後をつけよう、という計画だった。

しかし、和彦から事情を聞いた吉沢は、当初協力することを拒んだ。厄介事に巻き込まれたくないからではない。

息子のオシッコがかかったカンバスに筆を下ろしたくなかったただけだ。

だが、「名誉挽回！」と言わんばかりの寿々菜の説得に吉沢も折れ、一晩中かかって絵を修復したのだった。

「でも、この絵、どうしたんですか？」

吉沢が名画をしげしげと見つめる。

「本物の『轍』を描いた人が、迷惑をかけたお詫びに、と、くれたんです」

F美術館の館長は、素人作品を（そうとは分からず）高額で買い取ってしまったが、

結果として新進気鋭の画家、吉沢の作品を手に入れることができた。儲けとしてはプラスマイナス・ゼロと言ったところだし、

もう絶対に詐欺まがいのことはしない、と武上に約束させられ、無罪放免となった。

しかし野本氏は、「あんな絵で金を貰っては、やはり申し訳ない」と、

金を館長に返そうとした。

が、それでは館長はウハウハである。

そんなこと、もちろん和彦が許すわけがない。

やはり報酬を貰うべき人間が貰うべきだ、というわけで、

吉沢にこの絵を贈ることになり、こうして和彦たちが吉沢の家まで持ってきたのだ。

「そうなんですか。んじゃ、ありがたく頂きます。」

それしても、あんなお遊びの模写の礼に、こんないい絵を貰えるな

んてラッキーだな。

そっぴや、美術館に飾ってある俺の模写はどうなるんですか？」

「あれはもう、あのまま本物の『轍』として、飾っとくそうです」

「あはは、光栄だな」

館長も今更「あれは偽物です」とも言えないし、

野本氏の描いた「轍」を「本物です」と言っただけで公開もできない。

「東京に戻ったら、俺がラジオかなんかで、『轍』はよかった、って言っときますよ。」

ついでに、こっそり『描いたのは吉沢って人らしい』って噂も流しときます」

和彦はそう言ったが、どうやらこの吉沢は、KAZUのことを知らないらしい。

「え？はあ」と曖昧な返事をしている。

和彦さん知らない人が日本にいるなんて！！

和彦は気にしていないのに、何故か腹を立てる寿々菜。

人のことで怒る前に、自分の人気をなんとかして上げろ、と、山崎が寿々菜に冷ややかな視線を送った。

「父ちゃん！見せて、見せて！」

「うわ、馬鹿！これは大事な絵なんだぞ！イタズラしたら、許さないからな！」

後ろから肩の上に乗ってきた息子の大和を、
吉沢が一生懸命振り払う。

まだ幼いからなのか、それとも父親と違って絵心が無いからなのか、
大和は絵に興味がないようだ。

こういう所は、目つきの悪さとは違い、おそらく母親譲り・・・

「ただいま〜！」

ちょうどその時、玄関から明るい元気な声がした。

それと同時に、大和が「母ちゃんだ！」と叫び、玄関へすっ飛んで
行く。

「じゃあ我々は、そろそろお暇します」

「あ。はい。わざわざ絵を持ってきてもらって、ありがとうございます
ます」

「いえ」

武上たち4人が立ち上がろうとした時、

居間の中に、大和と一緒に勢い良く1人の女性が飛び込んできた。

和彦と同じ歳くらいだろうか。

元気ハツラツ！を形にしたような女性だ。

彼女が吉沢の妻にして、大和の「母ちゃん」らしい。

「ただいま！あゝ、疲れたあ！」

「ああ、おかえり」

「うん・・・あれ？お客さん？」

武上たちに気付いた吉沢の妻は、

和彦と寿々菜を交互に見比べた。

「あ・・・あああ！KAZUとスウだ！！」

「「「えええ！」「」「」

和彦、武上、山崎だけでなく、寿々菜も驚く。

若い女性なら、KAZUのことは知っていて当然だろうが、スウのことを知っているとは・・・

吉沢の妻は吉沢とは違い、相当の芸能通らしい。

「なんで！？なんで、KAZUとスウがうちにいるの！？ねえ！！」
「え？KAZUとスウ？」

吉沢が首を傾げる。

「もう！どうして知らないの！！あ、サインください！」

ハイテンションな吉沢の妻が、和彦と寿々菜の返事を待たず、サインペンと色紙を探す。

が、色紙なんぞあるはずもない。

「うーん、手頃な紙とかないかなあ」

吉沢の妻は部屋中をキョロキョロと見渡すと、

「あ！これ！これにサインしてください！」

と言って、吉沢の手から絵を引ったくって裏返し、和彦に差し出したのだった・・・

「アイドル探偵3 波乱の京都旅行 前編」 完

第12話 母ちゃん（後書き）

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございます。

今回は旅行編、ということであとちょっとライトな感じになっておりますが・・・

いかがだったでしょうか？

そして題名の通り「前編」ということで、懲りずに「後編」もあります。

更に懲りないことに、その他あと2つくらい「アイドル探偵」シリーズを書いております・・・見捨てずに読んで頂けると嬉しいです。さて、言い訳を1つさせてください。

京都のお話なのに、関西弁の人間が少ないということです（汗）館長と野本が標準語なのは、この2人を関西弁にすると、

「ぬしも悪よのお」「いえいえ、お代官様こそ」みたいになるので、敢えて標準語にしました。ただ、吉沢一家は・・・そう、彼らは、元々東京出身者なのです。その辺はまた、別の小説でどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690/>

アイドル探偵 3 「波乱の京都旅行」前編

2010年10月13日16時06分発行